

[謡曲の稽古法(観世元正)]

先づ稽古をする時には出来るだけ大きな聲を出すことが必要である。妙に恥かしがつて小さな聲で稽古してゐるような人は何年たつても上達しない。節廻しだけは出来るようになってゐても、諳らしい莊重さといふものが出て来ない、このことは特に婦人の方に注意して頂きたい。

次に妙な作り聲をしないことである。自然な聲で諳ふことが必要である。妙にカんだり咽喉をしめたりすることは大禁物である。咽喉は出来るだけ楽にして下腹に力をこめて諳ふべきである。それをやゝもすれば咽喉に力を入れて、苦しきうな聲を張り上げて得々としてゐる人がある。かういふ人は何時まで経つても上達しない。

次に發音に注意すること。五十音の中には美しい音もあれば、きたない音もある。固い音もあれば、やはらかい音もある。きたない音や固い音を出来るだけ耳だゝぬように發音するといふことは必要なことではあるが、それは高等教程に属することである。初心者は先づ正しく明瞭な發音をなすことが肝要である。よく妙な含み聲で、何を諳つてゐるのかわからないやうな諳を諳つて得意になつてゐる人があるが、かういふ人もその態度を改めない限り上達の見込はない。

また中にはわざわざ鼻にかゝつた聲を出して見たり、巻き舌で諳つたりして喜んでゐる人がある。私はかういふ人達の頭腦を疑はずにはいられない。

いふまでもなく謡曲は日本の音曲であるから、あくまでも正しい日本語の發音で諳ふべきものである。このことを特に初心の人に申し上げて置きたい。そして先輩の悪い癖を真似たりなどしないやうにして貰ひたい。

次に音階のこと。謡曲のみならず、すべての音曲においてその基礎となるのは音階である。初心者はまづ音階をハッキリと會得することに努力を傾注すべきである。音階がハッキリわかりもしないうちから、こまかい節扱ひなどを覺えたがる人があるが、これは本末を誤つてゐる。

謡曲には剛吟、柔吟の二種の音階がある。柔吟の中でもサシの音階は別個のものであり、またクヅシと稱する變態的な音階もある。これらを完全に會得することは容易ではない。

音階が完全に腹に入つたならば、細かい節扱ひの研究に入るがよからう。クリ、入り、イロ、アクリ、小節などの扱ひを會得することに努力をする。

この研究が一通り出来れば、先づ諳の外形だけは整ふ譯である。

尤もさらに拍子合方の研究をせねばならないが、何事もさう一時には成就し難い。拍子の研究をはじめたために節扱ひが粗雑になつたりなどしては何にもならない。拍子の研究は節扱ひを完全に會得してから初むべきである。

最後が曲の位の會得である。たとへば「高砂」なら「高砂」、「羽衣」なら「羽衣」、何の曲にでも一定の位がある。この位を會得せねばならない。

「位」といふ言葉は非常に含蓄のある、よい術語^{テグニツク}である。従つてこれを一般の言葉に翻譯することが難しい。とにかく曲によつて、そのテンポとか調子の程度がほゞ定まつて

ある。これを定める所のものが即ち「位」なのである。

この「位」なるものが何によつて決定されるかといへば、それは各曲の内容によるのである。即ち「高砂」の位は「高砂」なる曲の内容によつて決定され、「羽衣」の位は「羽衣」なる曲の内容が決定するのである。

断つて置くが、此處に内容といふのは必ずしも文學的内容をのみ指すものではない。その曲が能として舞■の上で如何に取扱はれてゐるか、その曲の位と重大な關係を持つのである。

従つて「位」を體得することの近道は能を見ることである。「羽衣」の位を知るには「羽衣」の能を見るが一番よい。たゞ「羽衣」の文學的内容を理解したのみでは、完全に「羽衣」の位を把握することが出来ない。能として如何に取り扱はれてゐるかといふことを知れば、位は自ら明かになる。

以上述べ來つたことを總括すると、諳は――

- 1 自然な發聲
- 2 明瞭な發音
- 3 正確な音階
- 4 正確な節扱
- 5 正確な拍子
- 6 正確な曲位

の諸條件を具備せねばならない。これを完全に備へたものが正しい諳である。

正しい諳といふことは必ずしもうまい諳といふことではない。正しい諳に次第々々に味が滲み出て來て「うまい諳」になる。然し初心の者が「うまい諳」を諳へるやうになりたいと望むことは邪路に踏み迷ふ基である。まづ「正しい諳」を諳へるやうになりたいと望んで稽古に勵むことが上達の秘訣である。